スペイン北部の山村の風土を生かして
——ナバラ自治州で出会った持続可能な暮らしへの挑戦者たち

Energías Renovables y Turismo Rural en Navarra, España:
Un peregrinaje alternativo hacia una forma de vida sostenible

安渓遊地* Yuji Ankei
安渓貴子** Takako Ankei

Resumen：（スペイン語による要約）

Los autores visitaron la Universidad Pública de Navarra en Pamplona de abril a septiembre de 2005, gracias a un programa de intercambio entre la Prefectura de Yamaguchi y la Comunidad Foral de Navarra. Navarra es bien conocida como el lugar de nacimiento de San Francisco de Javier y es visitada por numerosos peregrinos en su viaje por El Camino de Santiago.

En este artículo, describimos los encantos alternativos de Navarra： sus recientes desafíos en la introducción de energías renovables y turismo rural con el objetivo de alcanzar un estilo de vida más sostenible. Esperamos que este trabajo sirva como guía introductoria para los japoneses, y especialmente para Yamaguchi, como un peregrinación alternativa a modo de testigo de los logros navarros, y que sirva para hallar algunas pistas que nos conduzcan a nuestro objetivo de asegurar un modo de vida más sostenible para el futuro.

Guiados por miembros del Aula de Energías Renovables de Aibar, visitamos el Parque Eólico de Izco, el Centro de Biomasa de Sangüesa y la Fábrica de Biodiesel de Caparroso entre otros lugares. Fué una grata sorpresa descubrir la éxitosa reconversión a las energias renovables que los navarros han desarrollado en el curso de veinte años. Nos pareció además alentadora la idea de el Aula de Energías Renovables de combinar los recursos de la energía renovable y el desarrollo sostenible del turismo rural en el marco de atrayentes programas de educación medioambiental.

Para conocer el turismo rural, como puede ser el de las casas rurales, seleccionamos dos casos de interés con la idea de darlas a conocer en Yamaguchi.

El primero es una pionera casa rural en Urruska, cerca de Elizondo. Se halla cerca de la frontera de Francia en la montaña pirenaica. Se trata de una de las primeras casas rurales de Navarra, habiendo contribuido la familia propietaria a asesorar a la gente a cerca de cómo abrir y mantener atractivas casas rurales para los visitantes. Ahora recibe turistas de España y del resto de Europa. La esposa es responsable de la gestión y su marido, un granjero, le ayuda cuando es necesario. Los visitantes pueden experimentar actividades agrícolas en su compañía.

El segundo caso fue el hotel rural en Arrarats al norte de Pamplona. Su principal objetivo es ser energéticamente autosuficiente gracias a las energías renovables como por ejemplo un molino a pequeña escala, que posee paneles solares en la torre, y suministro de agua caliente a través de paneles solares. Depende además de un caudal para el suministro. El dueño usa materiales no tóxicos, leña en combinación con un moderno sistema para el calentamiento de paredes con tuberías de plástico para la conducción de agua caliente. Han restaurado completamente la casa original que estuvo abandonada durante más de 40 años. El proceso de restauración de la casa transformada en casa rural es de gran interés para los visitantes. También resultan divertidas las visitas a sus vecinos granjeros y un enorme roble que se encuentra en los alrededores.

Estamos en estos momentos planeando organizar una asociación de turismo rural en Yamaguchi para

＊ 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授
＊＊ 山口県立大学非常勤講師

visitar Navarra para intercambio de experiencias con la ocasión del 500 aniversario de San Francisco Javier en Mayo de 2006.

Nos gustaría agradecer al Sr. Javier Brieva Yoldi del Instituto Técnico y Gestión Agrícola y el Sr. José Miguel Gamboa Baztán y Sra. Beatriz Sola del Departamento de Cultura y Turismo del Gobierno de Navarra la oportunidad que nos brindaron de conocer casas rurales de interés. De igual forma, nos gustaría agradecer a la Srta. Montse Guererro del Aula de Energías Renovables de Aibar/Oibar por habernos guiado en nuestras visitas a plantas generadoras de Energías renovables. Nos gustaría también expresar nuestra más sincero agradecimiento al Profesor José Luis Iriarte Ángel, Vice-rector de la Universidad Pública de Navarra, en nuestro paso por la universidad y su fomento de los programas de intercambio e investigación. En último lugar nos gustaría agradecer a las numerosas personas e instituciones de Navarra que nos acogieron calurosamente ofreciéndonos su amistad y colaboración.

キーワード：ナバラ自治州，過疎，農家民宿，グリーンツーリズム，再生可能エネルギー

「われわれナバラ人は，誰もがあの聖フランシスコ・サビエルの心を自らの心として生きているのです。」
——ナバラの農家民宿の開拓者Javier Brieva Yoldi氏のことば

１．ナバラ州立大学との学生交換の開拓

出発の前日に辞令が届いた。

「人事異動通知書

安渓遊地・県立公立学校教員・山口県立大学教授

ナバラ州立大学との学術交流のため，平成17年４月19日から平成17年９月20日まで155日間スペインへ出張を命ずる。

平成17年４月18日　山口県知事　二井関成」

ちょうど500年前に，ナバラ東部のハビエル村にあるサビエル城でフランシスコ・サビエルは生まれた。長じてパリのソルボンヌの大学生となったサビエルは，1534年８月15日，同級生でやはりナバラ出身のイグナチオ・ロヨラらとともにイエズス会を結成した。モンマルトルの丘のふもとに，その舞台となった地下礼拝所が復元されている*1。

図１　モンマルトルの地下礼拝所

サビエルは1549年から1551年まで日本に滞在した。鹿児島からいったん京都に上ったが，戦乱で荒れはてた京都での布教をあきらめて，大内氏のもとで西の京

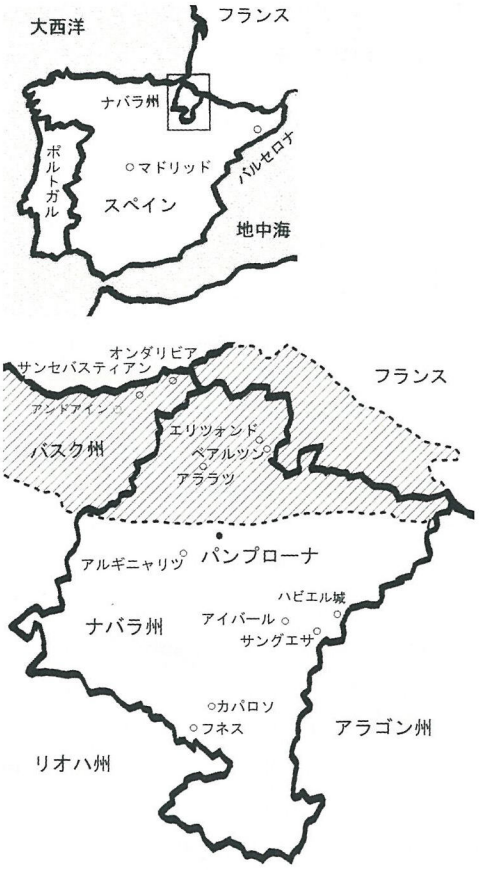

図２　ナバラ州の位置と主な地名
（斜線部は現在のバスク語圏）

といわれる繁栄を見せていた山口に滞在し，布教をした。

この故事によって，スペイン・ナバラと山口の友好関係が結ばれる。26年前に首都パンプローナ市と山口市との姉妹提携が締結され，パンプローナには５ヘクタールもの面積をもつパルケ・ヤマグチ（山口公園）が創られ，市民の憩いの場となっている。ここに立派な日本庭園を造ったご縁で，山口には「ナバラの会」が結成されて，活発な交流の中心となってきたのであった。

図３　パンプローナ市内各所の姉妹都市のプレート
（イルーニェアはパンプローナのバスク語地名）

図４　パルケ・ヤマグチ（山口公園）の日本庭園

この点と点の交流を面に広げるために，2002年，山口県議員団がナバラ州を訪問。それを受けて2003年11月山口県知事がナバラを訪問して新たにナバラ州と山口県の姉妹提携が調印された。岩田啓靖学長・陶山具史事務局長（いずれも当時）ほかの大学執行部が知事に同行して，ナバラ州立大学と山口県立大学の公立大学同士の学術交流協定も姉妹提携の目玉として調印された。2004年11月には，ナバラ州立大のホセ・ルイス・イリアルテ・アンヘル副学長を代表とする教員３名，学生５名の訪問団を山口県立大学に迎えて，学術フォーラムを始めとする活発な交流が実施された。また，相互に留学生を送るための学生交換協定が調印された。

このような経過で，スペインの新学期にあたる2005年９月から学生を山口県立大からナバラ州立大に派遣し，またナバラからの学生を受け入れるための現地の状況の把握と下準備が必要となったのであった。学内公募の結果，安渓遊地が適任とされた。前年11月の訪問団受け入れの際の交流および学生交換協定の締結の山口県立大学側の責任者としての実績が評価されたものであろう。なお，2004年４月から，県立大学の初級スペイン語のクラスに他の学生とともに参加して，フランシスコ・サビエルの兄から数えて15代目の子孫である，ルイス・フォンテス（日本名，泉類治）神父による猛スピードの授業に振り落とされないように努力したことも付け加えておきたい。授業には安渓遊地は皆勤，安渓貴子は委員を勤めている県の会議の都合で半分ほど参加した。

留学生交換の方は，2005年９月には山口県立大から３名（１年間），ナバラ州立大から１名（半年）の留学が開始されている。

図５　ナバラ州立大学のシンボル・図書館前で
（イリアルテ副学長と山口県立大からの留学生）

また，2005年11月には県立大から猪又徹学長代理，田村洋教授，水谷由美子教授と学生３名をパンプローナに送ってサビエルフォーラムやファッションショウが実施され，成功をおさめた。

この報告では，５か月のナバラ滞在中の印象的な出会いから，とくにわれわれが学ぶことを希望していた「生活と地域の持続可能性」の追求の現場での語りを紹介したい。ナバラの人々の勇気ある挑戦は，かならずや山口県を始めとして人口と担い手の減少に苦しむわが国の中山間地の現場に生きる人々にとっても，

様々なヒントと大きな励ましを与えるものとなるに違いないと考えるからである。そのため，この報告は，学問的な正確さのレベルをいささかも下げることなく，私どもの長期にわたるナバラ滞在を可能にしてくださった県民のみなさまにも気軽に読んでいただけることをひとつの目標として執筆したものである。

２．学術交流の研究テーマ

われわれの専攻は，地域研究である。安渓遊地は人類学の立場から，安渓貴子は植物学・生態学の立場から，西表島とコンゴ民主共和国の森での共同研究を開始して32年になる。その他に，屋久島での滞在や，フランスでの１年半の生活，ケニア・タンザニア・ウガンダ・ガボンといったアフリカの国々での調査，最近では山口県内での聞き書きなど，対象は様々である。

地域研究にあたって大切なことは，ごく簡単に言えば，学問への誠実さと地域への愛のバランスであると思っている。学問への誠実さとは，例え世間の常識とは違っていても，誰がなんと言っても曲げられない，曲げてはならないものがあると気づいたならば，その事を恐れることなく発信することである。

「地域への愛」は，「地域の生活者への誠実さ」と言い換えてもよい。地域の人々の生活とそこから生まれる正直な願い。互いにどうしても譲れないことがあることを理解した上で，できる限りの共感をこめて接すること。具体的には，プライバシーなどの人権についての配慮から，学問としての正確さが制限されることがあってもやむを得ないという基本姿勢がその中核となるであろう。

そして，地域での出会いが私たちの人生にも大きな影響を及ぼす。1978年，安渓遊地がコンゴの森の村長の養子になったことがひとつの典型であるが，フィールドワークの結果互いに相手の人生の物語の一部になるかも知れないという重い選択を迫られることがある。結局，自分への誠実さが，学問と地域への二つの矛盾しかねない誠実さを統合するものとなるしかないのではないか，と考えている。

スペインについては，バスク自治州とナバラ自治州でのごく短期の滞在を1988年夏と，2002年秋に２度経験しただけであった。習い覚えたフランス語が，国境を越えたとたんにまったく通じなかった経験が，今回のスペイン語学習熱の原動力となった。

2004年11月，ナバラ州立大学のイリアルテ・アンヘル副学長ほかの一行を，山口市仁保のわれらが山荘に迎えた時，2005年４月からのナバラ州立大学訪問の希望を伝えて歓迎された。イリアルテ氏の協力による共同研究のテーマとしては，「持続可能性」がキーワードとして提示された。相談の結果，了承された研究テーマは「適正技術とグリーンツーリズム：スペインと日本の農山村地域の共通の未来のために」となった。

ナバラ州立大学は，人口一人当たりの緑地帯面積がヨーロッパで一番広いことを自慢とするパンプローナ市内のはずれにある。緑のキャンパスの中に建物が計画的に配置され，その中央にそびえるのが，大学のシンボルの図書館である。アパートの物件が少なかった等のパンプローナ生活事情については，私たちのウェブページにゆずる。

さて，４月といえば学年の後半に到着したわけであるが，イリアルテ副学長の指示で，広壮な図書館の中に，鍵のかかるとなりあった小部屋を２つ確保された。インターネット接続の便宜も図っていただいて，勉強の環境は整った。

スペイン語が話せなければ，地域にでかけての研究はおぼつかないので，まずは大学内の語学センター通いを始めた。大学とは財政的には別の組織だというのだが，特別に無料で受講させていただけることになった。フランシスコ・シェラ所長の指導で，安渓遊地は，週２回の中級スペイン語のクラスに途中から参加したが，２月から学んでいるポルトガル娘たちとのあまりにも大きな能力の差に泣かされながら，それでもめげずについていくことを試みた。安渓貴子が受講できる初級クラスが開講されたのは，５月に入ってからだった。モルドバ共和国の若い先生たち２人とパレスチナの大学の再生可能エネルギー研究所の所長との５名クラスで，毎日２時間週５日という短期集中コースだった。遊地は，これに加えて初級バスク語を週１回マンツーマンで受けることにしたので，週15時間以上の授

図６　ハビエル・ペレス先生のスペイン語クラス

業をとることが条件の学生ビザをとることも可能なほどの語学漬けの毎日だった。

3．多様性の自治州ナバラ

フランシスコ・サビエルは，エチェベリア家という貴族の家に生まれた。サビエル城（現在のスペイン語ではハビエル城）は，アラゴン王国との境界にあって，ナバラを防衛するためのものだった。「エチェ」はバスク語で家の意味，「ベリア」は，新しいという意味なので，「新しい館」というような意味だった。バスク語が話されるバスク語圏と，スペイン語しか通じない他の地域の境界線は，現在はパンプローナの北を通っている。しかし，これはバスクの文化と言語への弾圧と抵抗の結果を示すものであって，サビエルの時代には，少なくとも現在のサビエル城のあたりまではバスク語圏に含まれていたのである*2。

不幸なことにバスク文化やバスク語に対して日本人がいだく知的な意味での純粋な興味は，バスク独立運動などの政治的な問題とリンクしてとらえられることがある。そういうわけで，こういう話題は多くのナバラ人には好まれない。スペイン内戦の中で，北側のバスク州は人民戦線側につき，南のナバラ州はフランコ側についた。バスク人たちの抵抗意欲をそぐために，爆撃による無差別の虐殺が行なわれ，その犠牲になったのが，ピカソの絵で有名なあのゲルニカの町だ。フランコは，ナバラ州の人々にバスク州の村々を攻撃させるようなことまでしてバスク内部の分断をはかった（バード・狩野，1995：332）。

フランコの死去の直後，1975年11月にフアン・カルロス国王を元首に迎えて1978年12月には新憲法が成立し，スペイン王国は17の自治州の連合体として再出発する。独自の言語への権利をはじめとして最大の自治権を獲得したカタルーニャ（州都はバルセロナ）とバスク（州都はビルバオ）につぐ大きな自治権をナバラ自治州は得た。長いナバラ王国の歴史を背景に，独自の自治法をもち，独自の警察組織ももっている。*3

現在は，新憲法のもと，建前としてはナバラ州はスペイン語とバスク語のバイリンガルな自治州と規定されている。そのため，公立の施設や交通機関ではすべての広報は二つの言語でなされることになっている。公立大学でもその建前は大切にされているが，実際には，バスク語によっておこなわれる授業は少ない。

訪問前には「バスク祖国と自由」という完全独立をめざす組織のテロのことをやや危惧していたが，一時の客として滞在する限りにおいて，夜に出歩いても身の危険を感じるようなことはまったくなく，パンプローナをふくめてナバラ州のどこに行っても，「ヤマグチからの珍客」として受け入れられ，平和の中に安心して過ごすことができた。

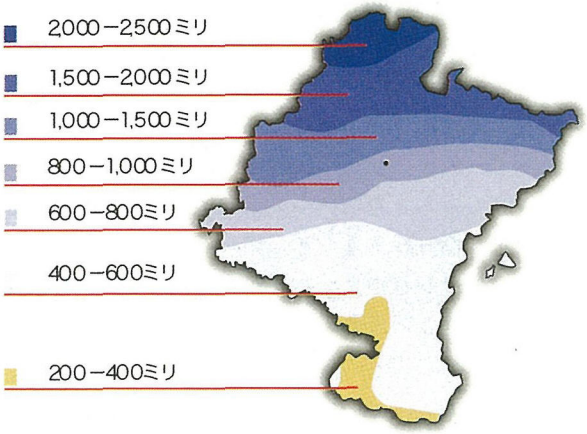

図7　ナバラ州の年間降水量（© Gobierno de Navarra）

さて，政治的な状況についてはこれ以上深入りしないことにして，自然環境を見ておこう。ナバラ州は，多様性の自治州と言われ，地形的には山がちの北部と平坦な南部に分かれる。東北部に，フランスとの国境をなすピレネー山脈があるが，海にも近いためせいぜい2000メートルの標高に過ぎない。年間降水量は，北端では2000ミリから2500ミリに達するのに対して，南端は200ミリから400ミリとなっている。この結果，北に行くほどブナやナラの森林が多く分布し，南の端にはバルデナス砂漠がある。このような標高の違いと降水量の違いによって，半乾燥の地域が多いスペインにあって，非常に多彩な景観が広がっているのが，ナバラの魅力である。フォスと呼ばれる峡谷は，容易に人間が近づけなかったことからハゲワシなどの希少生物の楽園として保護されている。

そして，その中に，古いものではローマ時代にさかのぼる文物や建造物が今も人の住む町の一部として生きて受け継がれているのである。サビエル城から遠くない，オリテの古城やレイレの僧院など，観光名所になっているところは多い。『ローランの歌』（岩波文庫）にその武勲が歌われた，シャルルマーニュ大帝の軍をバスク人がさんざん苦しめて追い払った場所Roncesvallesロンセスバリェスは，スペイン西北部への全ヨーロッパからの巡礼路の要所にあたり，今も多くの巡礼者と観光客が訪れる。ナバラ州にかぎらず，スペインには世界遺産に指定されている名所が30か所以上もあるのである。

言い忘れたが，ナバラの面積は，山口県の約1.5倍。

しかし人口は50万人で山口の３分の１程度である。単純に考えても人口密度は4.5分の１なのだが，パンプローナ市には新山口市とほぼ同じ19万人が住み，住宅が連続して建っている周辺の４自治体を併せれば，パンプローナ圏だけで30万人，すなわち全人口の６割が集中している。他には，7000人から2万7000人といった町が４つあって合計で36万人が都市人口，残りの約14万人が村に暮らしているのだ。したがって，過疎は大きな問題で，人口の都市への流出による後継者不足や，日本よりもいちじるしい少子高齢化の傾向など，共通する深刻な悩みがある。その悩みを解決するために，ナバラの人々がどのような経験を積んできたのか，さまざまな人々との出会いを通して，それを学びたいと思う。

４．ナバラにおけるグリーンツーリズムの歴史

A．文化観光省でのインタビュー

2005年６月になって，少しだけスペイン語の会話がかわせるようになってきた頃，バスク語を教わっているフアン・マリ先生が，ナバラ州の文化観光省への訪問をアレンジしてくださった。あらかじめ質問票をスペイン語で作ってインタビューに臨んだ。

観光局には，助成課と鑑査課と調整課（企画課に相当）がある。調整課長と部下の女性が対応してくれた。以下はそのインタビューの内容である。

――ナバラでの「田舎ツーリズム」（トゥーリスモ・ルーラル）の始まりと現状についてお教え下さい。

1980年代の終わり頃です。スペインでは，アストゥリアス州，バスク州，そしてナバラ州が先進地帯とされています。1989年にはナバラでたった５軒だったカサ・ルーラルが，2004年には552軒にまで増えています。これは，文字通りには「田舎の家」という意味ですが，農家民宿，農家ホテル，貸し別荘，など多様なありかたを総称する呼び方で，多くは持ち主が住んでいない貸し別荘型のものです。ですから，実際には，チーズづくりや，果実酒のパチャランづくりなど，農家での生活を味わえるものは多くありません。

――官民のバランスと補助金のしくみについてお聞かせ下さい。

官主導ではじめたものですから，当初は４割もの補助率で，雨後の竹の子のようにどんどんカサ・ルーラルができました。たしかに，ホテルを作るよりはうんとリスクが少ないんです。客が来なければ自分で住んでもいいし，いよいよだめならアパートのように売ることもできますから。現在は，量的にはもう目標を達成したと考えていますので，質を高めるということに力を注いでいます。補助金もだんだん減額してきて，今では，新築には原則として補助を出しません。古い民家の保全の場合には出します。それから，車椅子対応にするとか，再生可能エネルギーを取り入れるとか，質を高めるような取り組みには助成する，という状態です。一軒への助成の上限は現在のところ，２万4000ユーロ（日本円にして330万円程度）となっています。少ないという苦情が寄せられるんですけれどもね。

――現在の課題は？

質を高めることですね。ナバラ州政府として，他の模範になる質のサービスを提供していると認定したホテルやカサ・ルーラルやレストランには，その印の「Ｑ」（Qualidad，つまり品質の略）マークを発給して，カラーのパンフレットも作り，毎年審査をきちんとして，その高い質を保つようにお願いしています。そうでないものについても，全部を網羅したカラーの冊子を作って，観光客が訪れるところで無料配布し，旅行業者用により詳しい冊子も作って配っています。その他，各地域の見どころ紹介のリーフレットや地図，さらに「田舎ツーリズムを楽しむために」という「べからず帳」のようなものも，楽しい絵入りのカラー版で発行して，カサ・ルーラルに配って利用してもらっています。

――実際に訪ねるとしたら，どこがいいでしょうか。

ナバラのカサ・ルーラルは，数としては北部に多く分布しています。内容的には正直にいいますと，玉石混交です。地域振興よりも自分の金儲けが目的で始めたというタイプの宿には行かれない方がいいと思いますが，私どもからどこがいいとか悪いとかは申し上げかねますので，農村振興の立場から田舎ツーリズムに取り組んで長い経験を持っているハビエル・ブリエバさんをご紹介しましょう。

いただいた州政府発行の無料の資料等は，書店が有料で販売しているものよりも立派なものもあり，日本なら民業圧迫ととられかねないものが多くあった。お

そらくは農村人口が極端に少ないため，州政府ががんばらざるを得ないという実情があるのではないか，と想像した。お土産として，「ナバラ王国・多様性の大地へようこそ」という文字と電話，インターネットのウェブページが入った，メモ用紙，ボールペン，針なしステープラー，自動車の霜削り，料理用のミトンとエプロンをいただいた。案内のフアン・マリ先生も子どものための帽子を２つもらったのであった。観光立国スペインでは普通の観光への官としての取り組みの例なのかもしれないが，気の利いた記念品の多彩さに驚かされたのであった。

図８　ナバラ州観光課でもらった記念品の一部
（左から車の窓の霜取り・ペンダント・ミトン）

B．農業改良普及員ハビエル・ブリエバさんの言葉

文化観光省を辞したあと，さっそく電話をして，ハビエル・ブリエバ・ヨルディさんに会っていただくことにした。彼は，農業技術･経営研究所（ITGA）というナバラ州立の農業指導部局で，日本で言えば農業改良普及所のようなところの普及員であった。もとは農学校だったという，カラフルな飾りのある非常に美しい外見の古い建物を一歩入ると，中はすっかり近代的な鉄骨組みのオフィスに改装されているのに驚いた。ハビエル・ブリエバさんは，50歳過ぎぐらいの温厚な方で，ア・ラス・ドーセ（12時）とア・ラス・ドス（２時）を聞き間違えて，一度約束をすっぽかしてしまったのだが，にこやかに迎えてくださって，観光振興をとおした農村の活性化という課題について話して下さった。初対面の時は，より意志疎通が楽なフランス語で話した。

――ハビエルというお名前は，あのフランシスコ・サビエルと関係がありますか。

ハビエルは，スペイン語読みです。バスク語ではシャビエルと発音するようですが，同じ名前です。ナバラではとても普通の名前なんです。われわれナバラ人は，誰もがあの聖フランシスコ・ハビエルの心を自らの心として生きているのです。

――田舎ツーリズムとのかかわりを教えてください。

僕は，20年ほど前から，農家の収入を増やすためのひとつの方法として，観光と組み合わせた農家経営を，という取り組みの普及と支援を始めました。ここは峠を越えればすぐフランスですから，そこではもう70年もの歴史があって，実にさまざまな活動が観光と結びついて行われています。バカンス中に子どもたちを預かるような農場もたくさんあります。フランスでの先進事例を勉強して回るためにフランス語も話せるようになったんです。フランスに比べると，たしかにナバラでは農業体験的な楽しみをしてもらうというプログラムについてはまだまだという面が否定できません。僕の仕事は，農業経営の技術指導が主ですが，ずっと農業と観光を結びつけるというテーマを中心に進めてきました。

――やまぐちでは，2005年の７月に，僕たちの友人がようやく第１号のカサ・ルーラル（農家民宿）をオープンしたところで，ナバラよりさらに20年ぐらい遅れています。よい例があったら，ぜひいくつか紹介していただきたいのですが。

わかりました。そのうち，手透きの時をみはからっていい農家民宿をいくつかご案内しましょう。ナバラは結構広いから，２日ぐらい見てもらったらいいと思います。なんならフランス側に足を伸ばしてみてもいかもしれません。

５．ブナの森のウルスカ村に草分けの農家民宿を訪ねる

ある晴れた日，ハビエル・ブリエバさんの運転で農業改良普及所の車でパンプローナから北に向かった。高速道路ではないが広い道だ。窓の外はマツ林か麦畑のなだらかな丘が続く。所々に集落があって，窓にゼラニウムの赤い花を置いたかわいらしいホテルが見えたりする。マツ林がやがてナラ林に変わった。ヒツジやウシがまれに草を食んでいる。牧場も見える。次第に木が大きくなり，森が深くなってくるとハビエル・ブリエバさんは，「これはアヤの木（ブナ），この辺はロブレ（落葉のナラ・常緑のカシの類）が多い」とスペイン語で木の種類を教えてくれる。「僕は，町を離れてこのナバラの山あいの緑がいっぱいのあたりにくる

とほっとするんだ。全然ちがう世界だろう？」パンプローナの町のはずれとはいえ，緑のほとんど見えないアパート暮らしをしている私たちは，ハビエル・ブリエバさんの意見に深く共感する。

大西洋岸のHondarribiaオンダリビアへ通ずる幹線道路121-Aと分かれ右折し121-B号線をElitzondoエリツォンドの町まで走る。エリツォンドは，白壁と赤い屋根の家々が立ち並ぶ実に美しい田舎町で，ゆっくり歩いてみたい所だ。ブリエバさんは教会の横に車を止めて，なじみらしいバル（喫茶店）で休憩をとった。遊地は，ここで習ったばかりのバスク語を使ってみた。「カフェスネア・エタ・テ・エスネアレキン（ミルクコーヒーとミルクティー）」をください。スペイン語だとどちらもカフェ・コン・レッチェ，テ・コン・レッチェなのに，バスク語では，ミルクを入れて持ってくる場合と別に添える場合では表現が違うのだ。バスク語を少しはわかるブリエバさんはにこにこして見ている。店員さんは「私はバスク語がわからないんです」とスペイン語で答えた。「え，ここはバスク語圏じゃないの？」バスク語圏といっても，誰もが話すわけではないのだった。

「ここから10キロ森に入ったところに，素敵な女性がやっている農家民宿がある。そこを紹介してあげよう」そういって連れて行ってくださったのが，ピレネー山脈の西の端，ナバラ州の北東の端にあるウルスカ民宿だった。

エリツォンドの町からは細い田舎道になった。Beartsunベアルツン村への道だ。上り坂の山道を谷沿いに走る。農場と果樹園，牧場，一面ワラビの生えた草原が見える。農場の横には所々ワラビを山のように積み上げたものが見える。日本なら藁で作った稲叢である。何に使うのだろうと不思議に思った。どんどん山道を上がっていくと，石造りの建物があった。「あそこはフランコの独裁時代には，フランスとの密貿易を取り締まるための警察の詰め所だった場所だよ」という。フランス国境が近いことが実感される。上る途中からナラ林に混じってブナが見え始めた。林床にはびっしりとワラビが生えている。私たちにはなじみのない取り合わせだった。

ベアルツン村に入ると「カサ・ルーラル（農家民宿）」というしゃれた案内板が見える。州が作ってくれたものだという。谷道を再びたどるとやがて視界が開けて牧場が広がった。その向こうに農家が１軒，別の丘にも１軒，また１軒。さらに奥へ砂利道をたどって，最後の丘を登ると，そこが目的地Urruskaウルスカだった。家は１軒しかなく，行政的にはベアルツン村の一部だと思われるが，地図には，ウルスカ山という地名があるから，それからとったものだろう。農家民宿の名前は，Baserria Urruskaという。バセッリアというのは，バスク語で，田舎の庄屋クラスの大きな農家を指す言葉だから，「ウルスカ山麓・庄屋屋敷の宿」とでも訳すのだろうが，以下は簡単に「ウルスカ民宿」としておこう。本当に山の中という場所だが，休憩時間を除くとパンプローナからわずか１時間半のところだった。

図９　ナバラの農家民宿の草分け・ウルスカ民宿

緑の牧場の中に，赤い屋根，白い壁，赤い花が飾られた窓，納屋や薪小屋，農園が見えて絵になっている。山口では里山の手入れをしながら，年に20トン以上の薪を風呂と暖房に使う暮らしをしている私たちは，ここでもきちんと薪を使っていることに感心しながら入り口に立った。扉の上にひまわりのようなドライフラワーが飾ってある。キク科の花で，エグスキロレとバスク語で呼んでいる。上にはナバラ名物の赤い大きなトウガラシがすだれのように下げてあった。いかにも

図10　民宿の入り口（ナバラ名産赤ピーマンのすだれと魔よけの花。学名は *Carlina acaulis* L.）

農家に来た，という感じで何だか楽しくなってくる。

中にはいると一瞬薄暗く感じたが，女性が５人ほど机を囲んで話をしていた。

「オラ！こんにちわ，お久しぶり！」ハビエルさんが私たちを女主人に紹介してくださった。以下は，そこで聞いた話である。

私の名前は，Joxepi Miura Iribarrenジョセピ・ミウラ・イリバッレンというのよ。

――ミウラというのは，日本にもよくある名前です！

そうなの？ミウラというのはね，バスク語でヤドリギのことなのよ。ここで民宿を始めて14年になるわ。もともとは農家なんだけれど，今でも私の夫は農業を専業にしているの。

ここは，エリツォンドの町から登ってくる谷の最後の家。高度は999mで，山道を800mも歩けば稜線に出て，そこがフランスとの国境になっています。この屋敷は，1870年代に建った古い民家で，先祖代々住んできました。自分たちの住んでいた家の２階部分のうち５部屋を改装して民宿にしたんです。いま，私は年に一度のナバラ州政府認定のQ印を更新してもらうための審査を受けているので，ちょうど手伝いに私の娘が来ているから，中を案内してもらってちょうだい。

娘さんの案内で，１階から見学を始めた。暖炉が昔のまま残してあり，薪が置いてある。暖炉の上の木には，大きな字でOngi Etorriオンギ・エトッリと刻んである。バスク語で「歓迎」という意味である。その上には，磨き上げた銅の鍋が並んで美しい。暖炉の傍の焼き芋を焼く鉄の器を見せてくださる。今は使わない古い道具も飾ってある。窓辺にある棚には読みたくなるような本や観光案内が並んでいた。雨の日や雪の日には暖炉にあたってすごすのも楽しそうだ。暖炉に火が入る時期に来たいものだ。

図11　暖炉に火が入るころ（© Gobierno de Navarra）

二階にあがる階段が樫の木の板でできていて足に伝わってくる板の感触が柔らかい。傍らに木製のバケツが大小４つ大きさの順に並んでいる。これは，ヒツジやウシの乳を絞る時に，乳房の下につっこみ易いように傾斜した側面をもった独特の形のものと，乳を集めるための傾斜のない大きなバケツだった。こうした手仕事がつい先日までは盛んだったのだろう。壁には昔の農具がかけてある。二階は真ん中が廊下になっていて両側に居室がある。暗い廊下に昔風の電灯の明かりをつけると，この家の先代の結婚式の時の写真など，セピア色の写真や，古い鉋などの大工道具，多分チーズを量るための小さな天秤，穴が開いた銅の鍋などが飾ってあり，まるで小さな博物館のようだ。

図12　ウルスカ民宿の廊下は民具博物館のよう
（© Gobierno de Navarra，Q印の宿ガイドブック）

扉を開けて部屋に入る。白い壁と，天井は太いカシの梁が渡してあり間は白い漆喰が塗ってある。床はカシの板でどっしりした風格がある。部屋ごとにベッドや絨毯，カーテン，テーブル掛けの色や模様が統一してある。昔ながらのタンス，木の椅子，古いランプを利用した電気スタンド，くずかご。華やかな絵が描かれた昔の水差しが置いてありドライフラワーが活けてある。ベッドの陰には陶器製のおまるがぴかぴか光っている。部屋はどれもバス・トイレ付きだから今は使う必要がないおまるだけれど，ここに泊まる年配の人はなつかしがるだろう。10年ほど前にフランスの田舎で友人の別荘を借りた時には，おまるは必需品だった。

州政府の補助をもらってトイレと風呂を新たに各部屋につけたため，トイレ空間はそこだけ新しくコンパクトにまとまっている。しかし，ここも昔風の木の小物を生かしたなつかしいデザインを忘れないように工夫がこらされている。しかし各部屋には近代的な暖房用のヒーターがとりつけてあった。

窓を開けると，目の前は牧場でその背後に山並みが広がり，一角に菜園が見える。家の山側には果樹が植わっている。ここは牛の乳搾りや畑での収穫など農作業の経験もできる文字通りの農家民宿なのだ。家の横にある小屋には雌牛が一頭いるし，ピンクの肌をしたとてもきれい好きそうなブタたちも歩き回っている。

ブリエバさんの「農作業が手伝える農家民宿は，フランスには多いけれどスペインはまだとても少ないんだ」という言葉を思い出した。500軒以上もあるカサ・ルーラルの中から，第一に彼がここを選んでくれた理由が理解できた。

図13　きれい好きな豚が裏庭を歩いている

階下に降りるとジョセピさんが迎えてくださり，話をしていたお客さんを紹介された。その２人はなんと私たちを知っているという。１か月半前にアイバールの村であった「グリーンエネルギーとグリーンツーリズム」というセミナー（後述）で出会った２人の若い女性で，今日はＱ印認定の仕事としてウルスカ民宿の経営状態や現状について調べに来ているのだという。「ナバラは狭いですね」といって笑いあった。

「審査も無事おわったし，せめてチーズでも食べていってよ」とハビエル・ブリエバさんに言って，ジョセピさんは娘さんと机の準備を始めた。パン，チーズ，赤ワイン，みんな地元のものだという。歯ごたえのある田舎パンがおいしい。チーズの皮が堅い時はむいて食べることを習いながら，ハビエルさんの話，ジョセピさんの話をうかがった。

図14　民宿のＱマーク認定が終わって
（左は認定員，中央がオーナー，右ブリエバさん）

「泊まってみたいなあ，泊めていただけますか」と聞くと，「７，８月は泊まり客でいっぱいで５部屋とも詰まっているの。予約のノートを見てみましょう」とノートを開く。ほとんどは１週間程度の滞在で，空いていたのはわずかに，８月15日と16日の１部屋だけだった。すぐに「そこにします！」とお願いした。夏の２か月間ののべ320室のうち，空きが２部屋分しかなかったことになる。稼働率99％以上だ。ダブルの部屋代がシーズン中でも50ユーロと高くないせいもあって，たいへんな人気である。スペイン国内だけでなく，イギリス，フランス，ドイツなどから，夏休みをすごしに，エリツォンドの町から20キロもあるこのウルスカ民宿までやってくるという。家族で遠距離を車で移動してくるので道が少々遠くても，最後が砂利道でも気にはならないらしい。

パンプローナへの帰りに，ウルスカ民宿から遠くない，チーズ造りの農家が経営する貸し別荘型のカサ・ルーラルを訪ねた。Jauregiaハウレギアという名前で，

図15　チーズづくりの一家と（農家別荘ハウレギア）

ＩとIIの２軒がある。ハウレギアとは，大庄屋クラスの大邸宅を指すバスク語で，古い建物や調度を生かして，どちらもナバラ州選定のＱマークを得ている。家内手工業的なチーズ工場を見学し，ブリエバさんとともに，ヨーグルトなどをしこたま買い込む。ここは，農家体験ができる宿ということになるのだろう。おそらく，ブリエバさんと取り組みのもっとも初期から苦労をともにした同志ともいえる２つのカサ・ルーラルへ案内してくださったのだ。

ウルスカ民宿を予約した８月15日がやってきた。ところがこの日はパンプローナからエリツォンドに行く１日３便のバスが休日のため完全運休だという。それが当日になってわかったのだった。こうなればレンタカーを借りて自分で車を運転して行くしかない。右ハンドル・右側通行の道をはじめて運転をするのはかなりの勇気が必要だ。ところが，レンタカー屋も休日ですべて休んでいたのだ。やむなくその日は出発をあきらめて，ウルスカの宿には１泊だけ泊まることになった。

日本で乗っているタイプの車を借り，エリツォンドに向かう。初心者マークを貼った。幸い途中までは二度にわたってハビエルさんが案内してくださったコースなのですんなりパンプローナを抜け出すことができた。ナバラ州の道は山口県並みに良い道である。そして交通量は少なかった。

しかしナバラ州の道路は信号が少なく，多くはロトンダという円形のラウンドアバウトを回りながら方向を変えるというシステムをとっている。車に乗せてもらう度に，地図を見ながら自分で走るためのイメージトレーニングをしてきてはいたのだけれど，ロトンダを回るうちに方向がわからなくなることが多かった。行先の地名が書いてある所から出ればいいのだけれど，読み取りにくいし目的地が表示してあるとは限らない。例えば，山口市から下関市に行きたいとおもっても，「博多方面」と表示してあったりするようなものだ。外国人にはなかなかわからない。おなじ道をぐるぐるまわることも多く，パンプローナ市内から無事出られるまでに35キロも走った日もあった。

途中に「保護地域の森」というマークを地図上に見つける。Bertitzベルティツの森だ。ハビエルさんもいい森だと言っていた。通り過ぎて引き返したりしながら，たどり着いた。30台くらい車が止まっている。入り口に車を止めて案内の建物に寄る。

インフォメーションセンターがあって，地図やパンフレットを置いていた。手作りのおみやげや軽食も売っている。説明を聞き，パンフレットを読むと，ここはブナの森で昔はヒツジなどの家畜が入っていたのだが，ここ30年あまりは家畜を入れないでいるので森が回復過程にあることがわかった。さっそく時間が許す範囲で一番短い遊歩道コースを歩いてみることにした。ここは予想以上に生物多様性が高い，興味深い森だった。ブナの大木の根本で昼食を食べ，心残りではあったが３時過ぎには森を出てエリツォンドに向かう。

図16　ベルティツ保護区のブナの大木
（くりかえし伐られて再生したのがわかる）

道が小さな田舎道になり，不安を感じながらそれでもちゃんと約束の５時にはウルスカ民宿にたどり着いた。大きな犬が迎えてくれた。大きなトマトが篭に盛ってあるのが美しい。部屋に案内されてみると，谷が望める小さめの部屋だった。紺色で統一されていて同じ色のタオルがそろえて篭に入れてある。民宿だから石けんは自分持ちかなと思っていたら，小さい石けんとシャンプーが置いてあった。「全部の部屋で一気にシャワーを使ったら水が足らなくなりますから，様子を見て使ってね」と言われ，「農家民宿に泊まる時の心得」を絵いりで書いたパンフレットを見せてくださった。ナバラ州で出しているもので，なかなか楽しく描かれている。ナバラ州のがんばりが見える。近くの道路に出ている「ウルスカ民宿はこちらです」というしゃれ

た看板も州が費用を出してくれたものだそうだ。

夕方，鐘の音を響かせながらヒツジの群れが帰ってきた。窓から白い点々が近づいてくるのが見えて，やがてそれがヒツジだとわかる。草むらの中に潜って食べている。馬もいっしょだ。日が暮れる９時頃夕ご飯になった。

図17　農家民宿心得帳の抜粋（© Gobierno de Navarra「農家に来たら虫と臭いはつきものです」のページ）

一階に降りるとそこにはもう10人あまりの人が椅子に座って三々五々おしゃべりをしていた。子供用の椅子に座った男の子もいる。私たちはその横に座ってくださいと言われる。「こんばんわ，日本から来ました。パンプローナに住んでいて今スペイン語の勉強中です」「私たちはバルセロナから来ています。もう３日目です」「アラゴン州のサラゴサからです。明日はパンプローナです」といった具合だ。

まず白い豆のスープ，そしてトマトの薄切りの上にタマネギのみじん切りとハーブがのってオリーブ油がたっぷりかかったサラダがきれいだ。かごに盛ったパンが出される。サービスは，ジョセピさんが頃合いを見てやり，ご主人も地元の赤ワインの栓を抜いてすすめたり，食べ終わった皿を集めて交換するときなどに手を貸しておられる。メインは骨付き牛肉のステーキにサヤインゲン，カリフラワー，ジャガイモの付け合わせ。ポストレ（デザート）は自家製プリン，果物，ナバラ名物の羊のミルクをかためたクッハダ，チーズなどから選ぶというものだった。

翌日起きて窓を開けると，窓の真下で母羊が２頭の子羊に乳を飲ませながらこちらを見ている。畑のサヤインゲンを摘むこの家のご主人らしい姿が見えた。

朝食に降りると，もう先客２人が座っていた。バルセロナから来て数日を過ごし，今日はパンプローナに移動するという。新鮮な牛乳，オレンジジュース，パンとビスケット，ヨーグルトが机に置かれている。手作りジャムが３種類とバターも運ばれてきた。コーヒーと紅茶がポットにはいってきた。コンチネンタルの簡素な朝食というと，パンとコーヒー，紅茶だけというのが相場だが，ここはイギリス人もフランス人もやってくるから，色々なものが並んでいるのかもしれない。まずオレンジジュースを飲んだ。ジャムは甘みがおさえてあり香りが高い。

図18　ウルスカ民宿の朝食風景

食事が終わると，ジョセピさんに今日の予定を相談した。ここから山に散策するコースがいろいろあるという。私たちは，フランス国境から稜線をウルスカ山に登るコースを選んだ。

荷物を預けて軽いザックをしょって出発。山腹の登り道は未舗装で道にそってトネリコの大きい木が並んでいる。２から３メートルのところでいったん切られ，そこからふたたび枝を再生して葉を茂らせている。切った枝を薪にしていたのだろう。歩くうちにブナが出てきた。散在する木々の中にワラビが茂って一面のワラビ草原になっている。カラカラと羊の鈴の音がする。見ているとワラビの中から羊が顔を出した。ワラビの下に生えた草を食べているのだ。ワラビを高く積みあげた山が２つ３つとある。先ほどジョセピさんに聞いたのだがワラビを干したものを牛などの家畜小屋の下に敷くのだという。ウシが食べないものを敷藁にするのは良い考えだ。汚れたら，ワラビを持ち出せばかんたんにきれいになるし，堆肥にもなるという。さらに，ワラビを刈って取り除くことがワラビに覆われた土地に光を入れることになり，牧草が育つのだとワラビ草原を見ていて気づいた。

図19　草原に積み上げられたワラビ（畜舎の敷藁用）

15分も歩くと見晴らしの良い稜線に出る。フランスとの国境だ。フランス側からグループが登ってきた。子供が３人いる。「ブエノス・ディアス（こんにちは）」と声を掛けると「ボンジュール」とフランス語が返ってきた。フランス人の家族だった。詳しい地図をもっていて，私たちのめざすウルスカ山はきっとこの道だ，と自信たっぷりに谷沿いの道を指さした。私たちはお礼をいってその道をたどる。しばらくいくとどうも方向が違うと思えてきた。ジョセピさんに言われた道しるべの黄色いペンキの印も見えない。引き返そうと決めて戻り始める。ところが双眼鏡でのぞくと，フランス人たちは私たちがちゃんと指示した道を行ったかどうかを立ち止まって見届けているふうなのだ。おせっかいなフランス風に辟易して，彼らが見えなくなるまでちょっと休憩をすることにした。エリカやハリエニシダの写真を撮る。

図20　柵で囲われた牧場の後はブナの林

国境まで戻って黄色の印を探すと，10mほどはなれた岩の上に見つかった。稜線沿いの道である。90度異なる方向だったのだ。道の右側はフランス，左側はスペインだ。ここらではスペイン側の方が森がよく残っているようだ。フランス側はほとんどが草原になっていて木が見あたらない。ブナの森を切り開いて牧場にしてしまったのだ。雨が多い日本から来た私たちはこんなにも広い草原を見ると，つい土壌流失が起きているのではないかと気になる。実際，山地の草原では土がやせている。草原の草はよく食べられていて，花が咲いていないことが多い。

図21　稜線上からフランス側を望む
（集落や牧場になった山々が見える）

やがてブナの森が見えてきた。樹木はブナ１種だけの純林である。林床は草があったりなかったり。去年のものであろうブナの実の殻がびっしり落ちている。羊の糞も固まってあちこちに見られる。２本３本とブナの芽ばえが見られた。昨年はブナが豊作であったようだ。

谷を見下ろす尾根の出っ張りに，木で組んだ高さ10メートルもあるやぐらのような物が組まれている。遊地が上ってみるが，用途が分からない。後に，これは渡りでやって来る鳩の群れを追い込むための装置だと知った。やぐらの上で猛禽の羽音を立ててやると鳩の群れは谷底に急降下して，森の中に張った網で一網打尽になるというしかけであった。

ブナだけの林を抜け再び草原に出る。黄色い目印を追いながらウルスカ山を目指した。羊の踏み分け道をたどって山頂部に着くと一帯は太さが異なるブナの森だった。しかしここもブナ１種の森だ。ブナの大木がたくさんあって枝を低く広げている。国境を示す石と家のあとのような石の構造物があって，ここに国境警備兵がいたころのことが思われた。

６．ソーラー利用の農家ホテルと エネルギー自給の農家民宿

ハビエル・ブリエバさんが２回目の案内をして下さることになった時，私たちはフランス側へ行くのではなく，「再生可能エネルギーを利用しているなど，ひと味ちがう農家民宿があれば」というリクエストを出した。その結果，ブリエバさんが調べてくれて，パンプローナの北側に向かうことになった。実は，この時期のフランス側は，バカンス客でいっぱいであった。別の日に，自分たちだけでフランス側の事情もみて来ようと，ロンセスバレスとは峠をはさんでフランス側の，サンジャンピエドゥポールの町にレンタカーで降りてみたことがある。ところが，ナバラでは経験したことのない大渋滞に巻き込まれ，どこもバカンス客で満員だった。名前だけは田舎の民宿でも，壁紙がはがれた場末の宿といった体のものしか空き部屋はなかったのだった。

Ａ．太陽光発電で売電する農家ホテル

ハビエル・ブリエバさんとまず訪ねたのは，Perskeneaペルスケネアという名前のホテルだった。非常によく手入れされた整った内装で，美しく整えられた食堂が夕食用と朝食用に２つ準備されていた。少人数でもすばやく食事の準備ができるための工夫なのであろう。50代の男性のオーナーにインタビューした。

——私は，José Maria Astizホセ・マリア・アスティスといいます。もともと７ヘクタールの牧場をもつ農家だったこの家で生まれました。パンプローナでエンジニアとして10年ほど働いたあと，15年前に思い立ってふるさとに戻ってホテルを始めました。自動車道からの900メートルの道を舗装するのにずいぶんお金がかかりました。３年前に５キロワットの出力の太陽光発電パネルを据えました。太陽の向きを自動追尾する装置の上に載っていますが，ナバラ州政府が50％（現在は40％），スペイン政府が20％の合計70％もの補助金を出してくれたので，自己負担はわずかでした。売電もできるタイプです。20年はもつそうで，今の調子なら６年でもとを取れると思っています。太陽温水器も補助を受けて2000リットルの水を65度に温める能力があるものを着けました。これらによって，以前は９室の客室で年間6000リットル使っていた重油の使用量が半分に減りました。宿泊料金はダブルの部屋の２人分が朝食付きでオフシーズンは80ユーロ，ハイシーズンが90ユーロです。

——どこからのお客さんが多いですか？

国内からももちろん来ますが，外国ではイギリス，オランダ，ベルギー，ルクセンブルクあたりが多いです。少ないけれどフランスやドイツからも来られます。

——宣伝はどのようにしておられますか。

インターネットのホームページにも載せていますが，外国向けには，ガイドブックの方がよく見られているようです。年間の稼働率は，150日から170日ぐらい，約半分はお客さんがいることになります。

図22　自動太陽追尾式のソーラーパネルがある（農家ホテル・ペルスケネア）

Ｂ．アララツ村のエネルギー自給農家民宿

その次に案内されたのは，車で10分ほどしか離れていない，本格的な（送電線から離れた）自立型のエネルギー自給の宿だった。谷沿いの一車線の道を車でたどり，教会の塔が見えて，白い壁赤い屋根の石造りの

図23　エネルギー自給農家民宿カーニョ・エチェア（家の後ろに風力発電のプロペラが見える）

三階建ての農家が集まっている小さいアララツ村に出た。畑がところどころにあり井戸がある。どの家にも薪がたくさん積んである。砂利道に入って，ナラや雑木の林をしばらく行くと，牛や羊たちが草をはむ牧場がひらけ，その向こうに丘を背にした赤い壁の家がぽつんと一軒見えてきた。家の後ろには風車のプロペラがまわっているのが見える。人なつこい犬が二頭走ってきて出迎えてくれる。

驚いたことに，そこは，以前にサビエル城の近くのAibarアイバールの村で会って意気投合した知りあいのPatxi Gonzálezパッチ・ゴンサレスさんの経営する宿Kaaño Etxeaカーニョ・エチェアだった（アイバールでの催しについては自然エネルギーの項で後述）。パッチはパンプローナに出かけていて留守だったが，奥さんのAlbertaアルベルタさんが迎えてくれた。アルベルタのお母さんと五歳になる息子もいた。客の多い夏場は，手伝いの女性二人に来てもらっているという。ところが手伝いの女性のうちの年配の一人がにこにこしながら声をかけてくる。

あなたたちは，パンプローナのサンフェルミン祭の時，バスクの即興歌のコンサートを聴きに来ていたでしょう。

——ええ！？どうしてご存じなんですか？

コンサートのあとであなたたちにバスク語で質問に来た人たちがいたでしょう。その中の一人が私だったの。東洋人にバスク語がわかるのかしら，ふしぎふしぎ，と思ったのよ。

——あんなに大勢の人が集まる８日間も続く祭のなかでお会いしたのに……

そうね，なんて世界は小さいんでしょう！（笑い）

図24　１階の食堂とロビー（皿の彩りが美しい）

一階はバリアフリーになっていて，客室のトイレやシャワーなども車いすの人が使いやすいように設計されている。一階には客用の食堂があり，ホールになっている。薪ストーブの前にソファがある。大きな木の机があって，カボチャやトマトがさりげなく盛ってある。古い木の食器戸棚には華やかな色の皿が並べてあって，古いものを美しく生かしてなかなかおしゃれだ。家造りのことや電気のことはパッチでないと説明できないと言いながら，アルベルタは家の中を案内してくれる。部屋ごとに特色があり，カーテン，ベッドカバーやシーツ，タオル，絨毯などの色が統一されている。材木の多くは古いものの再利用である。スペインでは宿のタンスやランプ，椅子といった家具も古いほど値打ちがあるとされているのだ。スペイン各地にある国営のパラドールという宿泊施設では，お城のような建物の中に文化財級の調度があって宿泊費は非常に高いが，年中予約が一杯である。

アルベルタの言葉。

あなたたちのことは，パッチから聞かされていました。以前から日本には興味をもっているの。そうだ，ぜひ今度は泊まりにきて！招待するから。

——ありがとう。それじゃあ，お客の少ない九月ならゆっくり話せるかな。週末はどうでしょう。

週末よりも平日の方が，ほかに客がいない公算が大きいから，というブリエバさんの助言で，平日を予約した。

九月に入って帰国のための荷造りを始めた私たちは，レンタカーを借りてアルベルタとパッチの家に向かった。例によって寄り道をしつつ二人の家に夕方たどりついた。今度はパッチがひとりだった。足をくじいて下に降りるのがつらいからと，最上階である三階の，家族の居室で話し込むと，なんだか昔から友達だったような気持ちがしてきた。このところ曇天続きで風も少なく，エネルギー自給の家もお手上げだという。今日の夜の電気が心配だから，坂の上の発電塔においてある発電機にガソリンを入れて，起動してきてくれないか，と頼まれる。

犬たちといっしょに風力発電と太陽光発電をしている丘へあがってみると。大きなバッテリーが並んでいた。それなりに風は吹いて風車は回っているのだが，電灯だけでなく二つの冷蔵庫やテレビ，パソコンなどもあるから消費電力も大きいのだろう。

九時を過ぎて暗くなるころ，パンプローナに用事や

買い物に出ていたアルベルタが子どもと帰ってきた。夕食の準備が始まる。貴子が手伝わせてもらう。料理を覚えるにはこれが近道だ。スペインの夕食は9時以降が標準だ。滞在中のアルベルタの食卓を，メニュー形式でご紹介しておこう。

図25　パッチの発電塔
（風力発電と太陽光発電の組み合わせ）

図26　料理するアルベルタ

アルベルタの夏の食卓

1日目の夕食

・サラダ（レタス，到来物のトマト，タマネキのみじん切り，ツナ缶，塩少々，たっぷりのオリーブ油）
・野菜スープ（自家菜園のサヤインゲンとフダンソウ，ブルーチーズ少々）
・マグロのステーキ（マグロ切り身，オリーブ油，香辛料）
・パンとナバラ州の赤ワイン
・デザート（しぼりたての牛乳の手作りヨーグルト，村のハシバミの実入り）

アルベルタの食卓では，何にでも好みで醤油をかける。「タマーリ」と呼んでいる。溜まり醤油のことだ。

次いで2日目の食卓。

朝食

・コーヒー，紅茶，ココア
・パン
・ジャムとオリーブ油
・チーズ
・果物

パンにオリーブ油を付けるのはアンダルシア風だとか。

昼食

・トマトサラダ（トマトスライス，タマネギのみじん切り，オリーブ油）
・沖縄風揚げ豆腐（玄米正食の店の堅い豆腐，オリーブ油，たまり，これは貴子が担当）
・ステーキ（ナバラの牛肉，香辛料）
・焼きピーマン（ナバラ名物の大ピーマン，オリーブ油）
・パンとワイン

ゆっくり三時ころまでかけて食べて，そのあとは夕方まで昼寝。

自然の中で

二日目の朝，アルベルタが言う。

> 近所のおうちから畑の夏野菜を採りに来ないかといわれているの。冬野菜に畑を切り替えたいから欲しいだけ採っていいって。
> ——わあ，行きたい！

まだ足が痛むパッチを残して私たちはアルベルタの車で村へでかけた。車を村の集会場の広場に止めて野菜をいただきに少しあるいた。子ども達が珍しそうにこちらを見ている。野菜はもう収穫してあって袋ごといただいた。州政府の補助で作った石造りのサイロは

今は薪の倉庫になっていてナラの薪が投げ入れてあった。畑にはスイカよりまだ大きなカボチャが実をつけていた。

さらに，アルベルタの友だちで有機農業をやっている女性の畑を訪ねた。大柄な赤いシャツの女性に迎えられたのはイラクサが生い茂る畑だった。土は黒くてふかふかである。

私は，公共施設の清掃の仕事で給料をもらっているので，この畑での農業は趣味なのよ。でも，有機農産物の組合に入っていて，少しずつだけれど出荷もしているの。無農薬でやれる秘訣は，イラクサなのよ。畑に生えるイラクサをつぶして水に入れ，ここにある大型のポリ容器の中で腐らせたものが，殺虫剤としても使えるし，ウドンコ病などの病気にも効くの。おまけに，肥料としての効果があるから，これ以外のものは一切使わないわ。だから畑に生えるイラクサは大事に残してあるんだけれど，子どもも連れてくるんだったら，通路のイラクサは刈っておいたのにね。

図27　近所の有機農業の家で

イラクサが入った容器の中の液は，黒ずんだ緑色でかなり強い特有の臭いがした。用途によってこれを水で薄めて使うという。彼女の畑には大きなキャベツ，ズッキニー，トマト，ナス，フダンソウ，ピーマン，カボチャ，三種類のレタス，イチゴ，タマネギ，ニンジン……なんでも見事にできている。たしかにズッキーニはウドンコ病にかかって葉には白い粉が吹いているけれど，大きなりっぱな実をつけている。畑の端のニワトコのたわわな黒い実ではジャムを作るしアルコールに漬けてお酒も造れるという。畑の一角にはミツバチの巣箱もあった。

畑の山側の斜面は無農薬リンゴの果樹園になっている。リンゴの木の下では鶏が雑草を食べていて。卵を産むときは小屋に入って産卵場所で生むようになっているので，そこへ卵を集めに行く。鶏たちは夜は小屋で眠る。小屋には車がついていてリンゴ畑の中を移動できるらしいのは，面白い工夫だ。赤く色づいてきたリンゴをもいでエプロンでふいてくださったのをさっそくかじると，小さいのに甘くて酸っぱみもある豊かな味だ。日本のリンゴ農家の友人の話では，農薬散布回数はふつう十数回，減農薬で努力して減らしても７回程度という。日本ではリンゴを皮ごとは食べない私たちだが，このリンゴは皮ごとすっかり食べてしまったのだった。

アルベルタはもう１軒の農家に寄った。入り口を入ると広い土間の仕事場兼物置で，機械やたくさんの工具，農産物などが整然と置いてある。そこを通り抜けて奥の居間に行くとアルゼンチンから来たというお客さんと食事中だった。失礼してしまった，と思ったら「いいのよいいのよ，もう終わるところ。さあ入って」と迎え入れられた。それは８月にハビエル・ブリエバさんと初めて来た時お手伝いに来ていた年配の女性の家だったのだ。私たちを皆に紹介してくださる。80歳だというこの家の主人は羊を飼っていて現役，お元気だ。昔ながらの農家に見えたこの家の，家の中は新しく，台所では料理用の薪ストーブがはめ込まれ，赤々と火が入って美しい。日本の私たちの家も薪ストーブで暖房や料理をしているというと，話がはずむ。客間で本格的な寒さのシーズンの出番を待っている暖炉式の薪ストーブも見せてくださった。薪が至る所に積んであるわけである。パッチとアルベルタの民宿の客用の台所にもあったナバラ製だという機能的そうな料理用ストーブ。重さは200キロ以上ありそうだが，時間があったら工場に見に行ってみたい。できたらひとつ買って帰りたいと衝動的に思ってしまった。でも，薪をよく使うのはこういった田舎の事情であり，パンプローナでは電気やスチーム暖房がほとんどだ。

用件が済んで出口まで送ってくださった主婦は置いてあったキノコをアルベルタに持って行きなさいと手渡す。こんなにたくさんいただけないわとアルベルタは恐縮しながら結局ひとかかえいただいて帰った。「この季節，このキノコを食べないと秋が来たような気がしないの。あなたたちにごちそうできてよかった。」と家に帰って，夕食のしたくをしながら，キノコ入りオムレツの料理法を教えてくれながらアルベルタはうれしそうだった。

農家民宿の舞台裏

2日目の午後は，昼寝から起きるとパッチに頼まれた仕事が待っていた。足をくじいているパッチの代わりに民宿の水事情を証明する写真を撮影するというのだ。水源地は，カラマツの人工林を抜けて谷道を細い川ぞいに上がった所で，ブナ林の谷間にかなり大きな新しい水槽がある。そしてその近くにはやや小さいが，古い水槽がある。ところが，民宿でシャワーなどに使っている水は，いずれの水槽からでもなく，古い水槽の横にあふれてたまる水を，小さなろうとのようなもので集めて送っているのである。これは，上の水槽はパッチ一家より先にこの辺りに別荘を建てた四軒の家のもので，パッチ一家はその仲間には入れてもらえなかったし，別の水槽を作って利用することも，水が減るといって，拒否されているのだ，という。この状況を打開するためには，川の最上流部の利用許可を取ってしまうのが得策だと考えて，南のアラゴン州の州都サラゴサまで直訴に行くのだという。

インターネットで紹介するための，家の各部分の写真も頼まれて，デジカメで撮影したりしたあと，その夜はよもやまの話に花が咲いた。

翌朝目覚めて窓を開けると谷は霧に包まれていた。戸口で呼ばわる声に出てみると，全身霧雨に濡れた男の人が立っている。なにやらたいへん怒っているようだ。実は，きのうキノコをもらった，お隣り（といっても2キロ先）の家の80歳になるご主人で，パッチの家の二頭の犬が彼の羊たちを追いかけ回したというのである。たしかに犬が見あたらない。アルベルタとパッチがあやまったり，なだめたりしたのだが，大変な剣幕で，自動車で送ろうという私たちの申し出も断って，遠い山道を歩いて帰っていかれた。「はやく犬たちを捕まえないと，銃で撃たれてしまうわ」と言い残して，アルベルタが犬を探しに出かけた。

アルベルタが犬を探す間，足が痛いので留守番をしていたパッチとともに残された私たちは，薪ストーブにあたりながら，農家民宿のできるまでのこと，パッチのこれまでのこと，エネルギー自給を決心するまでのこと，などの自分史の続きを聞いた。そうするうちに，こんどは，別の年配の男性が訪ねてきた。日本人が来ていると聞いたので見に来たらしい。ベルツォラリ（バスク語の即興歌の名手）だと紹介されたので，まず私たちが1曲だけなんとか覚えたバスク語の民謡を歌った。まるで農家民宿（Benta）の宣伝のような愛の歌で，バスク語の歌の名手Mikel Laboaミケル・ラボアが歌っている曲だ。下線部がみごとに日本語の助詞と対応して快い。「僕の」は標準バスク語ではnireと習ったが，ここではnereと歌われている。

Benta**ra** noa	宿へ行き
Benta**tik** nator	宿から帰る
Benta**n** da nere gogoa	宿にある僕の魂
Benta**ko** arrosa krabelineta**n**	宿のバラとカーネーションに
Hartu dut amodioa	愛を見つけた

すると，おじいさんは大変な喜びようで，

おお，バスク語を勉強したのか。それは50年も前のなつメロだよ。実は私も大人になってから勉強して歌えるようになったのさ。

とバスクの歌をさびた声で次々に歌っては，スペイン語でその意味を説明してくださった。長く禁止されていたバスク語が解禁になって，たくさんの民謡や即興歌がまたおおっぴらに歌えるようになったことの楽しさとほこらしさがこめられていた。

犬を探しに行ったアルベルタは牧場や山の中を探し回って，昼過ぎに疲れ果てて帰ってきた。

こんなに帰ってこないのは，羊を追いかけまわして殺してしまったのかもしれないわ。羊は農家の大切な財産なのだから，そんなことをした犬は殺されても文句はいえないの……。

そんなアルベルタの苦労も知らないで，私たちがパッチと話していたこと。

バスク語教育を受けて

僕の名前は，Patxi González Martín Ruisパッチ・ゴンサレス・マルティン・ルイスだ。スペイン人は姓として，父方と母方の両方を名乗るからどうしても名前が長くなるんだよ。1964年にバスク地方のギプスコア県アンドアインという村に生まれた。父はナバラ州の人，母はスペイン南部のアンダルシアのグラナダの人だよ。

スペインで初めてできた，バスク語で教える小学校に入って，4，5年かよったな。スペイン語だけが公用語で，バスク語やカタルーニア語といった地方語は，長いフランコ独裁の時代（1939～1975年）ずっと公の場で使うことを禁止

されていたんだ。友だちがバスク州のサンセバスティアンの大学に行って，その帰りにバスク語をしゃべっていたというので，警察にひっぱられたことがあったなあ。

そんなわけで，どこからも支援はこないから，親たちが金を出し合って先生を雇い，校舎といっても名ばかりで，普通の家の一階が牛小屋兼物置だから，その壁にペンキを塗った程度のことで，別の「教室」に移るときは通りを横切って別の家にいったんだよ。生徒は30人近くいたと思うよ。両親は，自分はバスク語ができなかったけれど，バスク語を主に話す地域の人たちに僕をとけ込ませたいと思って，バスク語を使う学校に通わせたんだとおもうな。フランコが死んでからは憲法も変わって，バスク語で教育が受けられる公立学校もちゃんとした私立学校もできたんだよ。

13歳の時，父の仕事の都合で，フネスというナバラ中部の村に引っ越した。そこは，バスク語使用圏じゃなかったので，僕は上手に話せない。今，ここに住んだら近所の人たちはみなバスク語ができるから，息子にはなるべくバスク語で話そうとしているんだよ。やっぱり言葉は大切だから。

つれあいのアルベルタは，お母さんがイタリアのフィレンツェの人だけれど，ナバラの人と結婚して，フランスとの国境の海岸の町，オンダリビアに住んでた。彼女はそこで生まれたから，イタリア語もバスク語もできるんだよ。お母さんとは毎日イタリア語で電話しているし，息子にもイタリア語とスペイン語をまぜて話している。バスク語とあわせてうちは3つの言葉のまぜこぜだな。それと，お客さんのためには，フランス語と英語も話すから5つか。

地球に良いことは自分にもいい

ここに農家民宿を作るときに,「エネルギー自給の宿」ということを考えたのは，25歳のとき，「GEAヘア（ガイアのスペイン語）」という千人ほど会員がいる雑誌の編集にかかわるようになったせいかな。自然住宅とか自然農法（パーマカルチャー）とか，バスク州の原発計画を止めたり，北西部のアストゥリアス州の熊を救えとか，いろいろな環境問題についての取り組みを雑誌で取り上げたし，バスク支部で年に5回ぐらい発表会をやったりしたよ。そうする中で，こんな暮らしをしていたら，あと50年もしないうちに地球の破局が来る，ということを確信するようになった。地球にいいことは，必ず自分にもいいんだ，と納得するようにもなってきた。それで，地球にいい生活を自分でも実現してみたいと思って，土地を探し始めた。ところがどっこい，ここらでは長子相続で，土地を分割することを極端にいやがるんだな。ひどい過疎なのに，譲ってもらえるような土地や家はめったなことでは見つからない。それが現実だった。

この家との出会い

ようやく見つけたこの家は，もともとは倉庫だったのを小作人の宿舎として使っていたのを40年も放ってあったという荒れ果てた家で，電気も来ていない，水もないというところだから，なんとか売ってもらえたんだ。

図28　もともとはこんな倉庫のような家だった

まず第一に考えたのは，風水（フェンシュイ）だったな。バスクにも伝統的に風水によく似た考え方があるので，違和感はないよ。方位と色と形，いろいろ考えるべきことがあるけれど，入り口の方位が特に大事なので，これを南側から東側に移したんだ。それから，小さかった窓を大きくするために，その部分の石壁を下から上まで全部取りのけて積み直しさ。大きな石で一個300キロのがあったりして，そりゃ大変だった。それから，屋根裏を住める高さにするために，屋根を1メートルほど上げたんだ。暖房は電気ですることも考えたんだけれど，電磁波の悪影響が心配でやめた。それで湯が通るポリプロピレンの管を家中の壁に2000メートルも埋め込んで，お湯を通して暖房するんだよ。

本体工事に1年半かかったな。客間は5つあって，下から順にウラ・ルラ・エグラ・スア・アイ

図29　古い材木を活かした寝室

セアと名付けてあるんだけれど，バスク語で水・土・木・火・風という意味なんだよ。そして，ここらの習慣に従って，玄関の入り口の上にはエグスキロレの花を飾る。これは，花は太陽をあらわし，とげとげの葉が魔よけになるんだ。

エネルギーは，電気については，2.4キロワットの太陽光発電パネルと，小型風車だ。高さ27メートルの塔を建てて，3キロワットの風車を載せてある。ひとつの重さが240キロのバッテリーを14個並べているけれど，これが高かった。太陽温水器もあるんだけれど，隣地の植林されたカラマツが陰になって思うように暖まらないね。ここは不在地主が伐らしてくれないんだよ。料理と給湯は，一番空気を汚染しない天然ガスを使っているよ。風呂やトイレの水もわずかな谷水をためて使うんだけれど，夏場しか帰ってこないご近所の人たちが，使わしてくれないんで，絶対量がたりなくてものすごく苦労しているよ。明日は，ここから200キロ南のアラゴン州のサラゴサの町にある河川局まで出頭して，水源利用の許可をもらいに行くので，あなたたちに現場の写真をとってもらったんだよ。

ここで，犬探しから帰ってきたアルベルタが割って入った。

もともと私は，電柱を立ててもらって電気を引くつもりだったのよ。ところが，パッチときたら，自然エネルギーで自家発電するっていうじゃない。最初から喧嘩よ。塩化ビニールは使わないで極力自然に配慮した素材を使うとか，クレーンを借りないで人海戦術でやるとか，環境を大事にする理想はいいんだけれど，余分に経費がかかる話ばっかりなのよね。財布を預かる側としてはたまったもんじゃないわよ。パッチときたら，夢がいっぱいで――そこが良いところなんだけれど――なんでもやりっぱなし。後始末はみんな私なのよ。今日だって，雨の山の中を声を枯らして走り回ってきたのは私。

好きで結婚はしたんだけれど，だいたい，パッチと違って，町育ちなのよ，私。でもねえ，この家ができ上がってみたら，まだ2年ほどにしかならなくて，水のこともバッテリーのこともまだまだ大変なことが多いんだけれど，ここの暮らしがすっかり気にいってしまって……。今度は友だちを連れてまたきっといらっしゃいね。きっとよ。

図30　またいらっしゃいね！
（パッチとアルベルタの一家と）

ケニアで聞いたレンタカー屋の老主人の人生の知恵の結晶である「女こそ一家の柱だ。屋根を支える柱，すべての土台だ。女が家を支えているんだよ。だいたい考えてごらん，男を支配できるのは女だけじゃないか」（安渓遊地，2006： 205）という言葉をしみじみ思い出しながら過ごした，なかなかに起伏の多い3日間だった。再会を約し，抱き合ってわかれた。それにしてもあの犬たちはどうなったのだろうか。

7．ナバラは再生可能エネルギーのショウウィンドウ

ナバラ州立大学とアパートの行き帰りのバスの中から，パンプローナの町を取り囲む山々の稜線上に，白い大風車がたくさん立ち並んでいるのが見える。青い空に緑の山並み，その稜線に並ぶ何十という白い風車は，一幅の絵のようだ。カメラを望遠にして写真をとりながら，ナバラでの再生可能電力（日本ではグリー

ン電力と言うことが多い）をはじめとする自然エネルギー利用についてもっと詳しく知りたいと願った。

この願いは，ナバラの観光について話を聞きに行ったことをきっかけにみたされることになった。持続可能な観光と持続可能なエネルギー利用を組み合わせることで，農山村の振興がはかれるのではないか，という私たちの問いかけに，すでにそのような取り組みが始まっていて，６月末にちょうど第１回の発表会がもたれるというのである。

Ａ．アイバール再生可能エネルギー教室

場所は，サビエル城から遠くない，サングエサの町から10キロほど離れたアイバールという村だという。メールで予約をし，できれば近くの農家民宿に宿泊したいという希望を伝えた。返事には，農家民宿はどこも満員で，サビエル城のお膝元のホテルなら空いているというので，そこに２泊することにして，バスの都合で前の夕方にパンプローナをあとにした。

そこにあったのは，Aula de Energías Renovables de Aibar/Oibar，つまり「アイバール村（バスク語地名ではオイバール村）再生可能エネルギー教室」という看板が掛かった，倉庫のような建物だった。中に入ってみると，地球環境問題やナバラでの再生可能エネルギーの取り組みなどについての大きなパネルが何十枚もかかっていて，風車の模型や太陽光発電パネルの実物，木材を燃えやすく加工したペレットなど，いわゆる自然エネルギーについての非常に包括的な教育プログラムをおこなうことを目的とする場所であった。

ここを中心にして，６月17日から３日間の予定で，サングエサを中心とする15の自治体の連合体であるBaja Montañaつまり，ピレネー山麓地方でのエコツーリズムを考えるというフォーラムが開催された。

プログラムによる，１日目の午前中は，「再生可能エネルギーと観光を結びつけるために」という勉強会，午後は地元のワインの試飲，昼食を経てアイバールの村の見学。翌日は，一般の人々向けのプログラム。さらに３日目は，お祭で，太陽熱で料理を作るとか，自然住宅づくりやヨガなど，１日目に参加したそれぞれのカサ・ルーラルを経営する人々の得意とするサービスが目白押しに並んでいる。その中に，子ども向けの環境教育のプログラムも組み込まれていた。

われわれは，１日目の勉強会に参加して，自然環境保全や農山村振興についての意欲と経験をもつたくさんの人たちと親しく交流することができた。２日目は，ＮＧＯの責任者の若い女性，Montse Guererroモンツェ・ゲレッロさんにインタビューさせてもらった。それだけでなく，展示パネルの原稿のpdfファイルや，発表に使われたパワーポイントファイルなども惜しげなくコピーさせていただいたので，ナバラのエネルギー事情というのがだいぶ詳しく飲み込めたのであった。以下は彼女の説明とインタビューの抜粋である。

図31　アイバール村のフォーラムで（モンツェさんの話を聴く）

Ｂ．ナバラの再生可能エネルギーと観光の現状

――ここは，ＮＧＯですか。

そうです。2004年９月に開所するにあたっては，ナバラ州政府ほか，いろいろな所から補助金をもらって始めました。専従は今のところ私一人で，まだ自立するほどの収入を上げるまでにはいたっていません。

――ナバラのエネルギー事情について教えてください。

1993年までナバラ州では，水力発電がある以外はほとんどのエネルギー源は他からの輸入にたよっていました。ごく小規模な水力発電をのぞいては，地下資源を消費して大気中の二酸化炭素を増やすか，大きなダムで河川の生態系を破壊するようなものしかなかったんです。1992年のリオデジャネイロでの環境と開発に関する国連会議のあと，ヨーロッパ全体で，再生可能エネルギーへの転換の必要性が認識されるようになりました。それで，ナバラ州政府としても風力発電を始めてみることにしたんですが，まず，パンプローナ市内から見えるPerdonペルドン山脈の稜線沿いに試験的に建てて，住民の意見を聞きました。すると86％もの答えが，あれはいいものだ，という内容で，否定的な意見は，わずか３％しかなかったんです。これに力を得，ナバラは海に近く山脈がいくつも

図32　発電用風車公園パルケ・エオリコ
（© Gobierno de Navarra）

並んでいるという好条件のために，良い風が吹く場所が多いことを知ったナバラ州政府は，半官半民の会社ＥＨＮ（エー・アッチェ・エネ，ナバラ水力発電会社）を中心に，どんどん風車を建てることにしたのです。たいへんなスピードで風力発電は普及して，2005年現在は33か所の風車公園に，合計2000基を越える風車が設置されています。しかし，グラフで分かるように，2003年から2004年にかけて頭打ちが来ました。

送電線の建設コストや，自然が保護されている

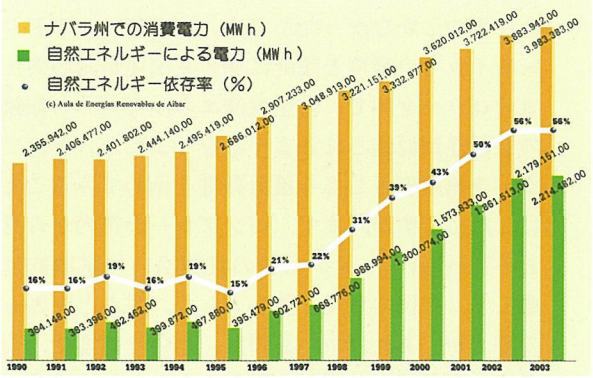

図33　ナバラ州のグリーン電力の割合の変化
（© Aula de Energías Renovables de Aibar/Oibar）

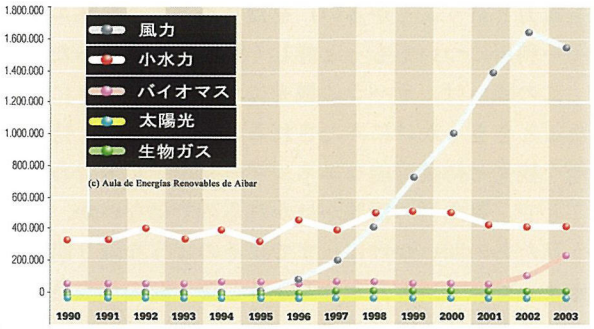

図34　ナバラ州のグリーン電力の種類別の伸び
（© Aula de Energías Renovables de Aibar/Oibar）

ピレネー山中には建てられないなどの制約のため飽和状態に達したのです。そこで，今後は20年で寿命がくる風車を現在の660キロワットから1500キロワットの大型のものに建て替えることによって，発電量を伸ばそうとしています。単に大型にするだけでなく，変圧器なしに送電線に直結できるようにするとか，２年に１度のギアオイル交換が不要になるとかの，技術革新も進んでいて，それがコスト削減にもつながります。2004年にＥＨＮは民営化されましたから，これまでナバラ州政府の庇護のもとにほとんど独占的にグリーン電力事業を進めてきた状況も，よい意味での競争にさらされるようになってくるでしょう。

もうひとつ，ここからすぐ近くのサングエサの町にＥＨＮが建てたバイオマス発電所があります。これは，麦わらとかトウモロコシの茎とかを燃やすプラントですが，もともと光合成で大気中の二酸化炭素を固定したものだから，地下資源とは違って，燃やしても二酸化炭素を増やさないんです。そのおかげで，グリーン電力は６ポイントほど増えています。太陽光発電は，まだまだこれから延びるでしょう。ただ，まだ珍しいので，せっかく設置したパネルが盗まれるという事件が起こっています。

――2005年のグリーン電力による自給率はどのくらいですか。

目標としては70％というところです。2010年には，ＥＵ各国がグリーン電力を21％以上にすることが定められていますが，ナバラはこれをはるかに超過達成しています。パイオニアとしては，2010年には100％グリーン電力による自給を実現する，というのが，ナバラの夢です。ただ，電力消費も伸びていますから，このままではいくらグリーン電力を増やしても追いつかないのではないか，と

	España（スペイン）		Navarra（ナバラ）	
石炭火力	72.562	31,1%	0	0,0%
原子力	61.848	26,5%	0	0,0%
水力（大規模ダム）	38.523	16,5%	0	0,0%
コジェネ	16.864	7,2%	551	10,6%
天然ガス	18.682	8,0%	2.405	46,4%
石油	4.242	1,8%	0	0,0%
再生可能エネルギー	20.915	7,4%	2.214	42,7%
風力	11.030	4,7%	1.549	29,9%
小水力	4.801	2,1%	417	8,0%
バイオマス	1.358	0,6%	234	4,5%
太陽光	8,1	0,0%	5	0,1%
生物ガス	3.718	1,6%	10	0,2%
TOTAL	233.636		5.181	

(c) Aula de Energías Renovables de Aibar

図35　ナバラ州とスペインの電源の多様性（2003年）
（© Aula de Energías Renovables de Aibar / Oibar）

危惧されます。環境教育と省エネがやはり大切になるということですね。

――スペインでは原子力発電はどうなんでしょう。

現在，７か所の原発がありますが，モラトリアム状態といいましょうか，寿命が来しだい閉鎖していくのを待つという状態で，増やすことへの国民の理解は得られていません。だって，ナバラの先進的なとりくみのおかげもあって，法整備と住民の協力があれば，二酸化炭素の排出抑制にしても，グリーン電力でここまでやれるということがはっきりしたんですもの。

――グリーン電力と観光のかかわりについて教

図36　アイバールの町並み
（ローマ時代の町並みの中での暮らし）

図37　アイバールの村で出会った元気なお年寄り

えてください。

このサングエサを中心とする地域には，観光客はよく来るんですが，例えばサビエル城に来ても，たいていは日帰りで，あまり地元にお金が落ちないんです。

小高い丘からなるアイバールの町はローマ以来の石造りの家々と美しい町並みで，そこに人々が暮らしています。お年寄りも子供も道や広場にたむろし，遊び，おしゃべりを楽しんでいます。山の頂きにはローマとゴチック様式が半々の教会があります。2000年の歴史と文化を味わうことがで

図38　アイバールの教会のコウノトリの親子

きる村です。ここはまた，キリスト教の昔ながらの巡礼の道も通っています。眺めがすばらしい。畑となだらかな山々に囲まれた独特の地形です。ローマ以前からの人と自然とが持続的に暮らしてきた自然が残っています。麦類やブドウ，オリーブの畑，羊や牛の牧草地と山々がひろがっています。村のすそにある教会の塔の上にはコウノトリが巣を作り，子育てをしています。

――景観としてはかなり違いますけれど，日本でも里山・里地といって，人間と自然が長く共存してきた環境を守って生かそうという動きがあります。

このような歴史・芸術・文化・自然の魅力に加えて，再生可能エネルギー生産の多様な現場がここで見られるのですから，この２つの資源を生かした複合的な観光をエコツーリズム・グリーンツーリズムとして打ち出せば，宿泊客も増えるでしょう。ちょうど，オリーブ油しぼりの古い家を改装したホテルがオープンを控えて仕上げをしていますから，あとで希望の方は見学に行きましょう。

アイバール再生可能エネルギー教室では，グリーン電力を中心とした地球環境問題への環境教育をセットした１日から７日のエコツーリズムのプログラムを用意してあります。どうぞご利用ください。今回の展示会は，その宣伝のための第１回目の取り組みです。

C．イスコ山脈の風車公園にて

８月に入って，現場を訪ねることにした。風車公園とワラ発電所の見学を，モンツェ・ゲレッロさんにお願いして，アレンジしていただいた。アイバールの村からほど近いIzcoイスコ山脈の風車公園の現場で説明を受けていると，ハゲワシが風車に近づいてくるのが見えた。

図39　イスコ風車公園で
（モンツェさんの説明を聞く）

――ハゲワシなどの鳥への被害ということはどうなんですか。

州政府主導でどんどん建ててしまったので，猛禽の保護区の近くのような，本来建ててはならない場所に風車が建ってしまった例はあります。でも，こうして見ている限りでは，鳥たちは，風車のことがわかっていて，それと遊んでいるようにも見えますね。

――だいぶ風を切る音がするようですが。騒音への苦情はありませんか。

最低でも人家から１キロ離して建設することになっていますから，苦情は出ていません。むしろ，村に土地使用料という名目で補償金が入って，52基建っているアイバール村では，毎年６万5000ユーロ（日本円で910万円ぐらい）にもなりますか

図40　祭りで牛の模型から逃げる子どもたち
（メリダ村の夏祭り）

図41　イスコ風車公園の石造りの制御室

図42　麦畑に積まれた発電用の麦わら

ら，隣りの村と誘致合戦になったという面もありました。もっとも，ナバラ人らしく，そういうあぶく銭はほとんどをお祭につぎ込んでしまうんですよ。パンプローナのサンフェルミンに似た祭がどの村にもあって，１週間ぐらい続きますから。それと，ＥＨＮは，環境教育への投資として見学客にも配慮して，ずいぶんお金をかけた石造りのコントロール室を作ったり，近くにあった伝統的な雪貯めの室を観光用に修復してくれたりということもしています。

D．サングエサのバイオマス発電所

サングエサのバイオマス発電所は，やはりＥＨＮのプラントで，2002年から稼働している。ヘルメットを借りるところから，案内・説明まで，すべてモンツェ嬢がとりしきってくれた。まず，200人ぐらい収容できる講義室でＤＶＤによってプラントのあらましの説明を見てから，見学用通路を通って現場を見るようになっている。それによると，ひとつ300キロから400キロの長方形にパックされた干し草を毎日10トン積みトラック45台から50台分ほどずつ受け入れ，重さと水分含量を自動測定して燃焼炉に送り，蒸気タービンを回して発電している。これによって，二酸化炭素削減効果は，年間16万トンに達する。全自動運転で休日も休まないため，受け入れ口に３日分のワラの備蓄ができるように配慮されている。３万7000キロワットの能力でフル稼働するようになってからは，ナバラ州の全電力消費のおよそ６％をまかなっている。

図43　サングエサのバイオマス発電所

外から見ると，煙突からは完全無色の排気が出るため，操業しているとはわからないくらいである。以下は，発電所の中を見ながらの質疑応答である。

――温排水の温度と放流先は？

取水温度プラス10度に調節して，エブロ川に放流するようになっています。

――焼却灰はどうしていますか。

重さで６％ほど出ますので，取りに来てくれるならワラを出してくれる農家に無料で返すことで，土地がやせるのを防ごうとしていますが，現実には難しくて，業者に処分を依頼している部分が多いのです。

――ワラの品質というのはありますか。

大事なのは湿度が低いことです。25％未満というのが基準です。トラックからおろすときに３つずつはさんで，その時に自動で湿度も測りますから，湿ったワラがあれば，真ん中になるように積み込むのが，農家の知恵というものです（笑い）。

――それにしても，穀物をとった後の麦わらで発電ができるとは思ってもみませんでした。やればやれるものなんですね！ワラ以外の物も燃やせますか。

いちおう，細かく砕いてパックした形になっていれば，材木などの森林資源も燃やせる設計にはなっています。

――今年（2005年）のような干ばつだと燃料が不足するのでは？

おっしゃるとおりで，頭の痛い問題です。ワラは家畜の飼料でもありますから。農家との10年契約で一定量のワラを確保することになってはいますが，今年のように極端に足りない年にはどうしても取り合いになりますし，余る年には，市場価格より高く買うことになって，経済的にはあまりペイしない発電所です。できて３年になるのに，２号炉建設の話が出ないのは，おそらくそのためでしょう。

E．カパロソのバイオディーゼル燃料製造プラント

再生可能なエネルギーへのナバラの取り組みは，電

図44　カパロソのバイオディーゼル製造工場

力部門だけではない。燃料の分野でも，植物油から作る，軽油に替わるバイオディーゼル燃料（スペイン語ではビオディエセルという，以下ＢＤＦと略）の大型プラントが，パンプローナの南のCaparrosoカパロソ村の近くで，やはりＥＨＮによって操業を始め，市内のセルフ給油所で給油できるようになったと2005年夏には大きく新聞で報道された。ＥＨＮにメールを送り見学を申し込んだところ，対応してもらえることになった。レンタカーを借りて行ってみると，入り口で待っていたのは，なんと旧知のモンツェ嬢だった。彼女はＥＨＮの広報係も一手に引き受けているらしい。

銀色のパイプのお化けのようなプラントの横には，原料の植物油のタンクや，製品のタンク，メタノールなどの必要な薬品の小さめのタンクなどが並んでいる。年間３万5000トンの植物油を処理してほぼ同量のＢＤＦに加工している，ということは新聞で読んでいた。一日あたりに直すと，100トン弱である。山口県にある使用済み天ぷら油の加工プラントが，下関市長府では日産100リットル程度，萩市の旧福栄村で日産40リットルというミニサイズのものだから，まさに桁違いの大きさである。レンタカーにＢＤＦを入れて走ってみたが，排気ガスが臭くないし，馬力もなんら遜色がないようだ。日本で捨てられている使用済みの食用油をＢＤＦに加工すれば，自動車燃料の２％をまかなうことができる，という記事を読んだことがある。ヨーロッパでは，排気ガスをクリーンに押さえたディーゼル車のセダンが環境にやさしい車として人気である。日本の自動車メーカーも小型で燃費のいい，しかも排気ガスのきれいなディーゼル車を作って欲しいものだ。そうすれば，ＢＤＦの活用の道ももっと開けるだろう。以下は，見学しながらの質疑応答である。

――原料油は，地域で生産されるものですか。先日の新聞にはこれで３万ヘクタールの農地が活用される，と書いてありましたが。

残念ながらすべてではありません。実際には，国際市場で買い付けるので，アフリカなどの安いパーム油などが主力になっているようです。現在EUでは，10％の作付け制限（減反）を実施していますが，油料作物はこれが適用されないので，その意味では農民がナタネなどの原料を生産する動機付けになりますし，事実作付けもされています。ただ，ナタネへの補助金が，１ヘクタールにつきわずか45ユーロ（6300円）しかありません。それならば，穀物として売って，残ったワラも１トン10ユーロで発電所に売れる，大麦，小麦，ライ麦やトウモロコシの方をなるべくなら作りたいとナバラの農民が思うのは自然なことです。

――原料をいくらで買っているのでしょうか。

それは，ＥＨＮに聞いても教えてもらえないでしょうね。私も知りません。一方，ＢＤＦの売値の方は，軽油と同額に定められています。これはＢＤＦが安く売られた場合に被る影響を回避するための石油業界からの圧力によるということですが，このところの原油高のせいで，売り値がずいぶん高くなっていますから，収支としてはかなりうまみがあるのだと思われます。次のもっと大きいプラントを作る話が出ていますから。それから，EUでは，2015年までにＢＤＦが占める割合を５％に高めるという取り決めがあることも付け加えておきましょう。

――副産物としてグリセリンができるはずですが。

年に3500トンほど出ます。これを，化粧品などにも使える品質に精製して，高く売るという計画で，グリセリン精製用の加工ラインを併設してあるのですが，プラントが完成してみると，精製グリセリンの相場が下がっていて，当初予定した価格では売れないようです。思ったようにはいかないものです。

――最後に若干の残渣が出るそうですが，見せてもらえませんか。

それは，工場の裏の方で，危険ということで，あらかじめ許可を取らないと見せてもらうことができません。

図45　アルギニャリツ村の薪を積む暮らし

図46　やまぐちの山村で薪を積む暮らし
（2004年12月）

8．おわりに

ナバラのグリーンツーリズムについて語り残したことは，パンプローナの西で廃村になっていたArgiñaritzアルギニャリツ村を復活させて，健康に配慮した住宅づくりを通した農家民宿に取り組んでいる建築士兼大工であるフアン・ルイスさんの家族との出会いである。訪れた宿は，それぞれに特色があるが，地元にあるもの，昔からあるものを大切に生かして，新しいアイデアをとりいれているのが共通点だった。エネルギー自給，床や壁面の温水暖房，薪の料理ストーブや暖炉，コルクの断熱材など。いずれもプラスチックは極力使わない。都市では得られない田舎のよさ，地域の人々が維持してきた自然とのふれあい，ゆっくり流れる時間，美味しい空気，本当の安心・安全。そういったものが確かにここにはある。そうした農家民宿をとりまく里山を含めた，実に多様なナバラの森の探訪記もまたどこかに書いてみたいと思っている。

グリーン電力については，ここで報告した以外に，風車のタービンづくりでは職人芸的な技術をもち，EUの新エアバスプロジェクトにも加わっているMTorres社を訪問したり，ナバラ州立大学で再生可能エネルギーの研究を行っているJosé Luis Torres Escribano教授らにも教えを請うたりした。今後の課題は，官主導でおこなってきた再生可能エネルギー利用の意味を，いかに生活者のレベルまで浸透させるか，ということであろう。その意味で，いまナバラ州が環境教育に力を入れて始めていることは理解できる。

環境教育への取り組みについては，パンプローナ市立で，教会を改装した「サンペドロ環境教育博物館」や，やはり市内にある「ナバラ環境資料センター」などを訪れて，担当者へのインタビューもおこなった。しかし，環境問題を学ぶには，体験学習がもっとも有効であると考えている私たちとしては，単なる展示や説明を越えたアイバール村の再生可能エネルギー教室のプログラムに新鮮な魅力を感じたため，ここではその活動の報告が中心となった。

ナバラは，これまでにわが国ではあまり報告されていない，さまざまな魅力と，われわれの生活を見直すためのたくさんのヒントを持っている地域である。例えば，日本では厄介者として田んぼで燃やされるか，よくて田んぼにすき込まれている稲ワラは，当然活用できるバイオマス資源であるし，里山の手入れを兼ねて出てくる竹や間伐材のペレット加工などによるバイオマスとしての活用も岩国市などで始まっている。風がナバラほど安定して吹かず，台風対策も必要な西日本では，風車はナバラほどの成功を収めないだろうが，逆にいたるところにある小さな流れを活用した小水力，マイクロ水力発電には，ナバラにない大きな可能性があると考えられる。さらに，日本では，二酸化炭素を

図47　サンフェルミンの祭で踊る人々

削減するためには原子力発電を増やすしかないという宣伝があるが，もっと手近で安全度も高いたくさんの取り組みが実は可能だったのである。

ナバラ州でのグリーンエネルギー生産は多様性に富みかつ成長産業でもある。その上環境にもいい。地球温暖化についての京都議定書の約束をＥＵ全体で実行に移そうと努力する中で，スペイン各地でもとりくみが行われ，その中でもナバラが最先端を風を切って走っている現状が熱く伝わってきた。その他にも，エネルギーを逃がさない家の構造や素材，さらに節電の工夫など，実に多様な取り組みがあった。ＥＵ全体でもこれらを強力に推進し，ナバラ州はＥＵから先進的事例として表彰されてもいる。

2006年度にサビエル生誕500年を記念して盛大に行われる記念行事に合わせて，山口県からも多数の県民がナバラを訪問する予定である。私たちは，グリーンツーリズムやグリーン電力に興味と意欲をもつ県民のみなさんとともに再度ナバラを訪問して，人間的な魅力にあふれ，フランシスコ・サビエルのチャレンジ精神を今に伝えるナバラの人々と，今後相互に交流を深めようと計画しているところである。

謝辞

José Luis Iriarte Ángel副学長を始めとする，ナバラ州立大学の先生方・職員の皆様には，大学の受け入れ，留学生交換に向けた共同作業，フィールドワークでの便宜供与について，公私ともに大変お世話になりました。大学付属高等語学センターのFrancisco J. Sierra Urzaiz所長，スペイン語のJavier Perez先生，バスク語のJuan Mari先生は，語学の教授を超えた，愛情にみち，時を得た指導や助言を与えてくださいました。

グリーンツーリズムについては，ナバラ州文化観光局のJosé Miguel Gamboa Baztán課長とBeatriz Solaさんに全般的な情報をいただき，ナバラ州の農業改良普及員のJavier Brieval Yoldiさんは，２度にわたって現地を案内してくださるなど，農家民宿の経営者と私たちの仲立ちをしてくださいました。多忙の中で対応してくださった農家民宿や農家ホテルの経営者のみなさんにも感謝します。

グリーンエネルギーについては，アイバール再生可能エネルギー教室のMontse Guererroさんとその愉快な仲間のみなさんに多くを教えられました。また，ナバラ州立大学のJosé Luis Torres Escribano先生とAlmudena Garicía Gorostiaga先生は，ナバラにおける再生可能エネルギーをめぐる産学共同の研究の現状についてご教示くださいました。

ナバラでお会いした日本ファンのみなさんや，日本人のみなさんにもたくさんの励ましをいただきました。泉類治先生は，私どものスペイン滞在中も，終始サビエルの熱い思いをもって接してくださいました。そしてなにより，独立行政法人化を控えて山口県立大学がもっとも多忙な時期にスペインへの派遣を実現してくださった県立大学のスタッフのみなさんにもお礼を申し上げたいと思います。

スペイン語の要旨の作製にあたっては，ナバラ州立大学からの留学生Óscar Tejero Villalobosさんの援助をうけました。

ありがとうございました。Muchas gracias. Eskerrik asko.

注

*1　Crypte de Montmartre, 11, rue Ivonne le Tac。最寄り駅はメトロのAbbés駅。パリの守護聖人となっている３世紀の人，サン・ドゥニゆかりの聖地をイエズス会結成の場所として選んだいきさつなどの説明をしてもらうことができる。見学は，原則として週１回，金曜日の午後１時から４時までとされているが，遠方からの参詣については，随時対応してもらえる可能性がある。参詣希望者は，事前にメールまたは電話で確認するとよい。
メールzygmunt.blazynsky＠wanadoo.fr,
電話は01.42.23.48.94。

*2　だから，サビエルとロヨラらは，２人きりの時にはスペイン語とおそらくバスク語も話したであろうし，ポルトガル出身の学生を交えるときには，フランス語とラテン語によって会話したのではないか，と想像している。バスク語が多様な助詞を含めて，日本語やハングルや南アフリカのコイサン語族の言語とほとんど同じ語順であることに私は驚いたが，サビエルもやまぐちで日本語に出会ったとき，そのバスク語の知識が異なる文法の理解のために大いに役立っただろうことは容易に想像できるのである。

*3　われわれが「ナバラ州立大学」と訳してきたUniversida Pública de Navarraは，正確にはナバラ公立大学と訳すべきであろうが，ナバラ州政府発行のナバラ案内の日本語パンフレットには，「ナバラ国立大学」と訳されている。これは，おそらく誤訳というよ

りは，ナバラ王国の伝統を誇りに思うナバラ人の心意気を示すものかもしれない。

引用文献

安渓遊地編，2006『続やまぐちは日本一　女たちの挑戦』弦書房

参考ウェブページ

日本語のウェブページ

・県立大学生へのスペイン留学の注意
http：//nagarjuna.ypu.jp/ankei_activities/
・安渓遊地・安渓貴子のナバラ報告
http：//ankei.jp/yuji/?c＝o
・山口県とナバラ州の姉妹提携締結
http：//www.pref.yamaguchi.jp/gyosei/kokusai/navarra/top.htm（2005年３月28日更新）
・山口市とパンプローナ市の姉妹友好都市関係
http：//www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/somu/etc/kokusai/friend/pamplona/（2001年更新）
・風力発電タービンへの猛禽の衝突
http：//www.d1.dion.ne.jp/～akaki_ch/windfarm.html（2006年１月16日参照）

英語のウェブページ

・ナバラ州立大学
http：//www.unavarra.es/english/index.htm（2006年１月16日参照）
・ＥＨＮ・ナバラ水力発電会社
http：//www.acciona - energia.com/site_i/index.htm（2006年１月16日参照）
・スペイン国立再生可能エネルギーセンター
http：//www.cener.com/?scc＝2&pdr＝2&idm＝2（2006年１月16日参照）

スペイン語のウェブページ

・アイバール再生可能エネルギー教室
http：//www.bajamontana.com/es/default.htm（2006年１月16日参照）
・ナバラ環境資料センターCentro de Recursos Ambientales de Navarra
http：//www.crana.org/index.asp（2006年１月16日参照）
・ナバラ州内のカサ・ルーラル案内（予約も可能）
http：//www.casasruralesnavarra.com/（2006年１月16日参照）
・アルギニャリツ村・健康住宅づくりの学校
http：//es.geocities.com/escuelabioconstruccion/（2006年１月16日参照）
・ウルスカ民宿
http：//www.urruska.com/（2006年１月16日参照）
・パッチとアルベルタのエネルギー自給民宿
http：//www.kaanoetxea.com/（2006年１月16日参照）